

2-2

被害を及ぼす鳥類の生態と被害の特徴



2-2-1 カラス類

日本には数種のカラスが生息するが、農作物被害が問題になるのは主にハシブトガラスとハシボソガラスの2種である。おでこの羽毛が立って盛り上がり、大きな声で良く鳴くのがハシブトガラス、やや小柄でくちばしが細いのがハシボソガラスである。冬鳥として渡来するミヤマガラスはハシボソガラスに似るがやや小さく、水田などで大きな群れで行動する。冬のねぐらでは3種が混じることもある。



■ハシブトガラス



■ハシボソガラス

▶ 1. 分布と生息環境

ハシブトガラスは日本全国、ハシボソガラスは九州以北の地域で1年中見られる。ミヤマガラスは九州や北陸で渡来数が多い。いろいろな環境に出現するが、ハシブトガラスは市街地や樹林を好み、ハシボソガラスとミヤマガラスは田畑など開けた環境を好む傾向がある。

▶ 2. 食性

雑食性で、穀類、昆虫、果実、鳥の卵・ヒナなどさまざまなものを食べ、生ゴミや動物の死体なども食べる。ハシブトガラスはハシボソガラスに比べて動物質の餌を好む傾向がある。ミヤマガラスは主に稲の落ちもみを食べる。

▶ 3. 繁殖や行動等

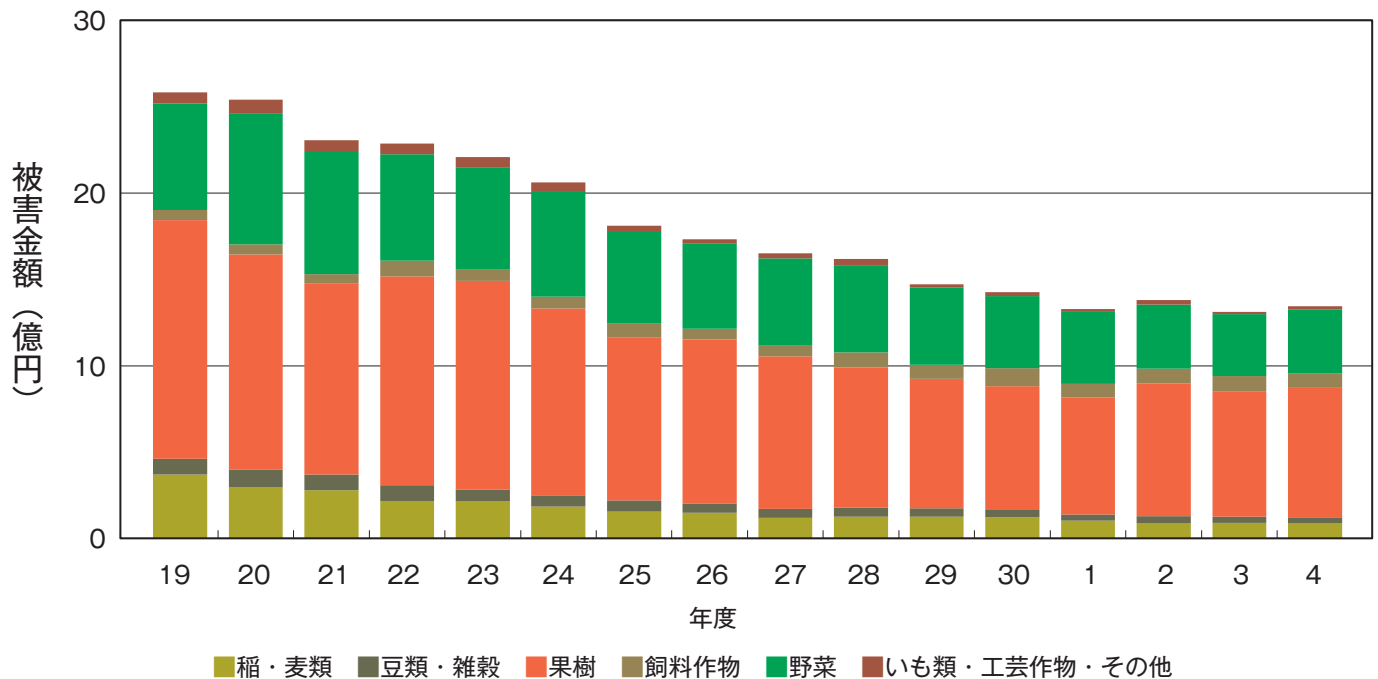
ハシブトガラス、ハシボソガラスともに一夫一妻で、つがいは直径数百mのなわばりを複数年にわたり維持する。繁殖期は3～7月。地上約10～20mの高さの樹上や高圧鉄塔に、枯れ枝や針金などで巣を作る。5～7月に2～3羽のヒナが巣立って家族で行動するが、7月頃からヒナは親元を離れた若鳥として群れに加わる。群れはなわばりが空くのを待つ繁殖予備軍であり、数十kmにおよぶ広い範囲を行動し離合集散する。ねぐらは数百～数千羽が林地などに集まって眠る場所で、秋から冬には集まる個体数が多くなるので目に付きやすい。

▶ 4. 農作物被害

長期的に被害は減少傾向であるが、近年は横ばいとなっている（図2-1）。被害は果樹と野菜で多く、被害量（重量）では飼料作物も多い（図2-2）。生まれたばかりの子牛や弱った牛をつついて傷害する、ビニールハウスやラップサイレージのフィルムを破く等の被害もあり、被害対象や内容が、他の鳥類と比較して多岐にわたるのがカラス類の特徴である。

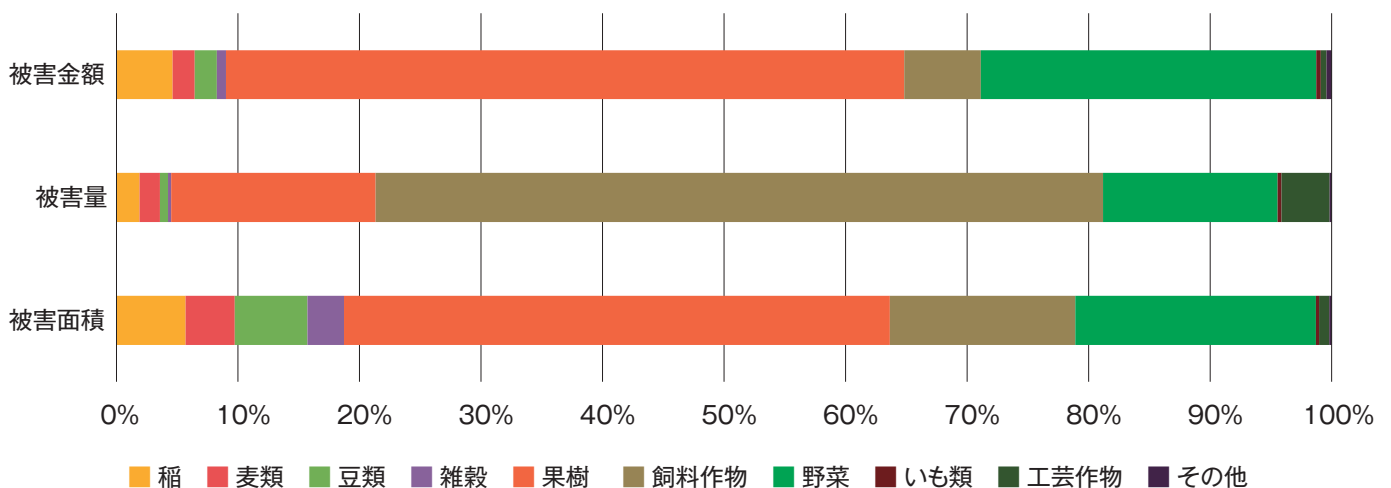
各種穀類の中ではとうもろこしを好み、播種期には出芽後10日くらいまで苗が抜かれて種子が食べられ、登熟期には外皮を引き裂くようにむいて実を食べる。ほとんどの果樹で被害があり、野菜では果菜類の被害が多い。

図2-1 カラス類による農作物被害金額の推移



データ:「全国の野生鳥獣による農作物被害状況について(令和4年度)」(農林水産省)

図2-2 カラス類による作物別被害内訳(令和4年度)



データ:「全国の野生鳥獣による農作物被害状況について(令和4年度)」(農林水産省)

▶ 5. 被害の特徴



■とうもろこし

出芽した苗を引き抜き、種子部分を食べる



■とうもろこし

引き抜かれた苗が枯れて散乱している(赤い円内)



■とうもろこし

カラスは穂の先端から皮を引き裂くようにむいて食べる。カラスによる食害では、穂が根元から折れることはあるが、株ごと倒されることは少ない。ハクビシンによる食害と似ていて区別が難しい。

■とうもろこし:ハクビシン

この写真ではハクビシンが穂の中程を口でくわえて皮を開くようにむいたことがわかる。



■日本なし/みかん

果皮および果肉にカラスのくちばしに一致する大きさのV字型の切り裂きがあれば、カラスによる食害とわかるが、このようなわかりやすい食痕にならず、ムクドリ、ヒヨドリ等と区別しにくい場合も多い。





■ぶどう

カラスは果実袋をくちばしでつまんで破くため、引き裂いたような破き方になることが多い。ハクビシンやアライグマも果実袋を破くので注意が必要。



■ぶどう: ハクビシン

ハクビシンは果実袋を口でくわえて、上から下へ引きおろすように破くことが多く、カラスによる被害と似ている。ハクビシンの場合は噛んで吐き出した果皮がその場にたくさん落ちていることが多い。アライグマは前肢で果実袋を破く。



■すいか

カラスのくちばしに一致する大きさのV字型の切り裂きが明瞭。くちばしを刺して引き抜いた傷跡もみられる。



■すいか: アライグマ

アライグマは前肢を使って果肉をくり抜くように食べる。カラスがあけた穴からアライグマが食べ進む場合もある。